

令和 8 年度小松市立安宅学校 学校評価 2

	目標・具体的取り組み	取組の状況（中間・ 8 月提出）	取組の成果と課題（年度末・ 3 月提出）
生徒指導	〈自治的活動の充実を図り、児童の自己指導能力を高める〉	・昨年度と比べて、学校全体として落ち着いて学習に臨める児童が増えてきている。 ・善悪を考える前に、不適切な行動に出てしまう場合があるので、感情のコントロールが必要である。そのために、気持ちに共感したり、代弁してあげたりすることを職員が取り組んでいく。 ・生徒指導の 4 つの視点を生かした声掛けを、授業の中でも継続していく。 ・担任だけでなく、職員全員で児童を褒めていく。	
	・学級や一人一人に向けて「どんな学校にしたいか」「どんなクラスにしたいか」「どんな自分になりたいか」目標を考えさせ、その実現に向けて振り返る場を設定し、自己調整を促す。 ・児童一人一人の良さや成長を認め、励ます温かな関わりを職員で意識する。		
特別支援教育	〈要支援児童への支援体制の充実を図り、児童の自己存在感を高める〉	・支援を必要とする児童に対し、個別の指導の時間を設定することで、効果的な支援や児童の自己存在感を高めるようにしている。 ・相談室を有効に活用し、配慮を要する児童の実態把握、実態に応じた支援を行っている。 ・生徒指導サポーターの支援を受け、保護者との関係強化、改善を図るとともに、組織的な対応を行ってきた。 ・支援を必要とする児童の多くは、学力的に不安を感じている。効果的な支援を行っていく上では人的資源の充実が不可欠である。	
	・スクールカウンセラー、特別支援教育支援員、生徒指導サポーター、心の相談員等の専門性を生かした支援体制を構築し、授業者や児童のニーズに応じ、効果的な支援を行う。 ・配慮が必要な児童の実態把握に努め、実態に応じた具体的な支援・手立てを検討するとともに定期的な検証と改善に取り組む。 ・保護者や関係機関と連携し、児童の特性に応じて組織的な支援を行う。		
道徳教育	〈道徳の授業を充実させ、自らつながり学ぶ子の育成に努める〉	・授業構想シートについては以前まで使用されていたものより、簡略化したものを作成した。 ・夏休み中に研修の機会を設け、構想シートの作り方について周知し、2学期の単元に関して一人1枚（授業参観等の公開に向けて）の作成を行う。	
	・ねらいとする道徳的価値に迫る授業を構想するために「授業構想シート」の活用の仕方を共通理解し、実践と交流を行う。		
体育・保健	〈自らの生活をふり返り、体力向上と健康の増進に向けて主体的に行動する児童を育成する〉	・補助運動を授業で週2回以上取り組んだ教職員は 8 0 % だった。児童の課題が改善できるよう、スポチャレの取り組みと合わせて継続的に取り組んでいく。 ・アンケートではメディアの時間が2時間以内は、58.3% だった。1 学期末にネットチャレンジを行い夏休みにはあたかも生活カードを行い結果を確認し、夏休み明けに保健指導を行っていく。 ・寝る時刻についてはアンケートで61.7% がだいたい守れているだった。学校保健委員会では睡眠について取り組み、睡眠の重要性を学ぶことでメディアの時間も気を付けていけるような取り組みを行っていく。	
	・児童の課題となっている運動特性の向上のための補助運動を授業で週2回以上取り組む。 ・学級担任と養護教諭が連携し、生活習慣（メディアとの付き合い方）や感染予防についての保健指導を行う。 ・学校保健委員会の事前生活アンケート、長期休業中にあったかも生活カード、学期ごとのメディアチャレンジで自らの生活をふり返る機会を設ける。		
情報教育	〈ICTを活用し、児童も教師も自らつながり学び合う環境の整備に努める〉	・児童は学習用端末を積極的に活用できており、日常的な利活用が定着している。 ・学習用端末の操作は定着したため、今後は「自分の考えを伝え・表現するツール」としての活用を目指す。そのために、1 学期の実践を学校全体に交流する機会（8月27日予定）を設定・実施する。 ・高学年を中心に校内外での生成AI利用が見られるため、市の方針に沿って個人情報保護やファクトチェックなど、生成AIの危険性と正しい使い方の指導を徹底する。 ・教員の興味のあるICT活用についてのアンケートを行い、個人の技能向上や事務作業・教材研究の効率化に向けた研修を継続して行っていく。	
	・生徒指導部とも連携し、生成AIの正しい利活用や危険性と情報モラル指導を徹底し、児童の情報活用能力を養う。 ・教員間の実践交流を行い、児童がICTを「自分の考えを表現するツール」として使いこなす授業実践を推進する。 ・校務のデジタル化に向けた研修を行い、事務作業・教材研究の効率化を図る。		
安全指導	〈自分で自分の身を守るという意識をもち、状況に応じた安全な行動がとれるようにする〉	・アンケートでは「安全に気を付けて行動していますか」の児童の肯定的評価は91.7%、「児童は自分の身を自分で守るという意識をもち、状況に応じた安全な行動をとっている」の教職員の肯定的評価は91%と児童と教職員の意識はほぼ同じで高い値となった。教員による児童への声掛けが効果的に行われ、児童が「場面や場所に応じた安全な行動ができている」と実感できたためであると考えられる。さらに意識が高まるよう、児童会の企画や学級活動、普段の安全指導など指導していく。 ・避難訓練、引き渡し訓練において避難したり、振り返りを行ったりすることで防災意識を高める指導を行ってきた。2 学期以降も避難訓練では、個別の指導を充実させ、さらに防災意識高めて安全に避難行動ができるよう指導をしていく。	
	・校内の安全について正しい知識をもち、場面に応じた行動をとることができるよう、児童会の企画や学級活動を通して継続的に指導する。 ・避難訓練や保護者への引き渡し訓練において、教職員や児童の防災意識を高める。学校の実情にあった教職員の動きを想定し共通理解した上で、児童が安全に避難できるよう指導する。		
家庭・地域社会との連携	〈学校・保護者・地域との効果的な連携を図る〉	・ホームページや学校だより、tetoru等を効果的に活用し、学校行事や不審者情報等の必要な情報を保護者・地域へ迅速かつ継続的に発信することができた。 ・防犯隊との情報交換会で話し合いを行い、登下校中の子どもの様子等について情報を共有した。教えてもらった地域の声を教職員で共有し、日々の安全指導や家庭への呼びかけに活かすことで、地域・家庭・学校が一緒になって子どもたちを見守る安心な環境づくりに今後もつなげていく。 ・総合的な学習の時間やクラブ活動（茶華道等）において地域人材を積極的に招き、日々の授業では学べない貴重な体験活動を実施することができた。また、読み聞かせボランティアである「なぎさの会」による定期的な活動を通じ、児童が本に親しむとともに、地域の方々に見守られている安心感にもつなげることができた。	
	・学校だよりやホームページ、tetoru等の媒体を効果的に活用し、学校の教育活動に関する情報を保護者や地域の皆様へ迅速かつ適切に提供する。 ・児童の健康や安全に関わる事案に対し、状況に応じた最適な手段で家庭や関係機関と密に連絡を取り合い、確実な情報共有と双方向の連携を図る。 ・各教科や総合的な学習の時間、クラブ活動等において、地域の専門的な人材を積極的に招き入れることで、地域社会と協働した豊かな学びの場を設ける。		

学校関係者評価	
---------	--